

忘れがたい花

伊原さと子

幼い日、れんげ畑に寝ころがり大空を見上げた日のことを覚えている。一体感のようなものを感じたのか、心地よさが忘れられず、春が来るたびに探したが二度と味わうことはなかった。

その後長い間、花は、通りすがりに「ああきれいだ」と眺める対象だった。花が異なる姿であらわれたのは、人生の様相が変わった頃のことである。慣れぬ事が重なり、なす術もなく息を止めて暮らしているような日々が続いていた。れんげ畑の体験からは半世紀近くたっていた。

当時、家の敷地の片隅に小さな椿の木があった。病が見つかった頃に父が鉢から植え替えたものだが、何を思っそうしたのか。理由も聞かぬまま、あつという間に逝ってしまった。

その年、季節は巡っても椿は花をつけなかった。

翌年の冬の初めに、薄桃色の一輪の花が開いた。透き通っていてみずみずしく、こんな花はこれまで見たことがないと思った。生命をありありと感じ、息を吹き込まれる感じがしたのである。

もうひとつ、花との忘れがたい体験がある。

「茶の本」(岡倉天心)の花の章にちなんだ一文を書いたときのことである。確かな意図もなく書き始めたのは、ある昔の出来事についてだった。消化しきれず心の奥底に追いやっていたことだった。

出来事のあった日、真夜中の暗闇で白い花をみた。数年来何の変化もなかった家のサボテンが初めて花を咲かせたのだ。その姿が目には浮かび、動かされるように筆を進めた。文の終わりに近づいたところで、天心の言葉がその花と結びついた。

「花御供」について書かれた一節だった。

こういう例をみると「花御供」の意味が充分にわかる。たぶん花も充分にその真の意味を知るのであろう。彼らは人間のような卑怯者ではない。

(「茶の本」 岡倉覚三 岩波文庫)

あの日に咲いた花によって、起きてしまった事象そのものが救われるということがあるのかもしれない。そんなことがすつと心に入ってきた。一度たりとも思ったことのないことだった。捧げられた白い花がかすかに見えた。

長い時を経て、言葉に導かれ気づかされたことの不思議を思った。花も言葉も人の思惑を超えているのだろう。

忘れがたい花の体験は、みな不意に訪れ私の身に落ちた。ただ頭を下げたくなる。

花は花であって

花でなく

風は風であって

風でない

言葉は言葉であって

言葉でなく

私は私であって

私ではない